



Title	中世カシミール民衆文学における覚醒 : Lal Ded 神秘詩訳註
Author(s)	立石, 恕之
Citation	印度民俗研究. 2020, 19, p. 45-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中世カシミール民衆文学における覚醒

Lal Ded 神秘詩訳註

立石 恕之

1. 概説

Lal Ded あるいは Lalleshwari, Lal-‘arifa は 14 世紀カシミールのヨーギニー、つまりは女性ヨーガ行者である。彼女はタントラ的な背景を有したシヴァ教の神秘主義思想を、スーフィズムの影響を受けつつ、詩に残している。本稿はその詩の一部を翻訳・紹介するものである。日本で紹介されることはあまりなかったが、彼女とその詩の翻訳・研究は多くなされてきている。翻訳として Hoskote (2017) や Kak (2007) など多数があり、研究として Odin (1999) や Toshkhani (2002) などがある。

2. 資料

Grierson (1920: 3) によると Stein が資料を集めた時点で Lal Ded の詩には、正統とされる伝承というものがある訳ではなく、口伝で継承されるほか家々に断片が少しづつ伝わっているという状態だったようである。Rājanaka Bhāskara の梵訳つき断片も知られていた。

本稿では概ね Kak (2007) のテキストを採用し、ラテン文字化に疑義のある箇所等は Grierson (1920) を参照して独自の判断で修正した。

3. 後世への影響

彼女の詩は、現代カシミール文化の礎を築いたと言われる同時代、やや後のスーフィー Nund Rishi はじめ多くの詩人や神秘家に影響を与えていている。カシミールにおいて Lal Ded の詩は現代に入ってからも祭礼の折朗誦される他、会話中に慣用句として用いられるなど、民衆に親しまれているという。長きに渡ってヒンドゥー・ムスリムを問わずカシミールの人々に崇敬され、宗教の違いを超えた立場を得ていた。

しかし 1990 年代以降両宗の対立が深まり、ムスリムたちはアラブ的イスラームに向かう姿勢を見せる。Lalleshwari は Lal-‘arifa (この呼称 자체は以前から存在した) として読み替えられた。逆にヒンドゥーたちも Lal-‘arifa を Lalleshwari として読み替えたと言える。中立性を期すならば Lal Ded、Lalla などと呼ぶべきであろう。ここでは Hoskote (2017: 1) にしたが

って最も通りの良いという Lal Ded をとるⁱ。

4. 詩作の背景

彼女の一生については 1747 年に Khwaja Azam Diddamari によるペルシヤ語で書かれたカシミールの年代記 *Wāqi'āt-i Kashmir* に伝記が載るまで口頭でしか伝えられず、伝記中の史実と伝説が混然としている。誕生と死亡がいつどこであったかも詳細に分かっていない。Lal Ded はバラモンの家系に生まれ当時の習慣にしたがって 12 歳で結婚する。夫の家族にはよく扱われていなかったようである。26 歳でシヴァ教の聖者 Siddha Śrīkāntha に師事し、放浪乞食生活に入る。詩はこの頃書かれ出した。Temple (1985: 2) によればスーアーの教義も学んだことがあるという。

本稿で訳した詩節には放浪生活を送っていたという背景が反映されている。その一方生活と日々の労働に根ざしたような詩想も表しているが、織工として社会生活に従事していた、同じく民衆の言語で宗教融和的な詩を作った Kabīr と似て異なる雰囲気を出している。

また Lal Ded は神へ恋情のようなひたむきな愛を向ける Bhakti 運動の詩人に数えられることがあるが、信の道 (Bhakti-mārga) よりも知の道 (Jñāna-mārga) を重視したこと、集団に身を寄せず一人歩いたことなどをもって Hoskote (2017: 10) はこれを否定する。

Lal Ded がサンスクリットではなくて Kashmiri で詩を書いたことについて、Kaul (1973: 3) によれば Lal Ded は形式主義を嫌い、排他性を嫌ったと伝えられている。インドの伝統学問を身につけておらず Kabīr のように聞き覚えの哲学をもとに詩作をしたとする学者もいるが、Hoskote (2017: 16-18) は本稿詩節 11 などの Lal Ded の詩節から彼女のカシミール・シヴァ教の教義への深い理解を読み取り、その説を厳しく批判する。そしてサンスクリットを学んでいながら民衆の言語で民衆の意識に彼女の思索の奔

ⁱ カタカナにするならばラール・デドほどか。ded は「祖母」を意味し、現代 Kashmiri では d'ed と口蓋化する。

流を叩きつけたとして Lal Ded を評価している。

カシミール・シヴァ教はガンダーラに源流をもつ大乗仏教瑜伽行派とヒンドゥー教との対峙を経て形成された。瑜伽行派はヨーガの実践に基盤を置き、唯識を説いた。外界が存するのは意識を介して存すると受け止められるという限りにおいてだという点でカシミール・シヴァ教は瑜伽行派と一致する。

またヴェーダーンタ学派の不二一元論と、反二元論的な立場をとり、究極の实在者がただ一つ存在し人間にはアートマンに関する知識がないとする点で一致する。ただし、カシミール・シヴァ教は瑜伽行派や不二一元論と異なりこの世界が迷妄だとはしない。この世界はシヴァ神が創造として自らを実現したものであるという。

Lal Ded の詩においては「空」と「我」がカシミール・シヴァ教における究極のものとして描かれる。空について扱った詩節は今回取り上げていないが、我についてのものはいくつか訳した。今回は放浪者としての詩を主に取り上げようと試みた。

5. 言語

歴史上、13世紀に Rājānaka Shiti Kantha が初期 Kashmiri で書いたシヴァ教哲学書 *Mahānaya-Prakāśa* に次いで現れる Kashmiri で書かれた文献が Lal Ded の神秘主義詩である。Lal Ded の言語は現代のものに近い。Grierson (1920: 128) は口頭伝承の中で廃れた言葉遣いを理解可能な形に置き換えた結果だろうとしている。Avatāra Bhatta の叙事詩 *Bānāsura Kathā* は Lal Ded より後に作られた文献で、現在伝わる彼女の詩よりも古い語形を残すとも Toshkhani (2013: 7) により指摘されている。

6. 韻律

韻律について Grierson (1920 144 ff.) 中の引用によれば、カシミールで実際に歌われるのを聞いた Stein は音長は関係せず強弱に基づくと考察している。Grierson 自身は強弱に基づいてペルシャ詩やインド詩の韻律の変形

で説明できるものが多いと書いた。ただし Grierson は「正統な」形が変形して「俗な」形になるという見方に捕らわれているのではないかと Hoskote (2017: 24-26) は指摘している。

7. 発音上の注意

新期インド・アーリア語の多くと異なり、(現代) Kashmiri には母音 e と o と ɔ の長短の対立ⁱⁱがあり長短の中舌母音 ə と ɪ が存在する。また、有声有氣音がないが、ほとんどの子音に対応する口蓋化子音が存在する。口蓋化はアポストロフィで表記した。

ⁱⁱ長い ɔ: は音素として存在しないとする説もある

8. 文法註凡例

+ (1. D.) 動詞の人称接尾辞（一人称単数与格）	impv. 命令法
+ indef. 不定接尾辞	inf. 不定法
+ emph. 強調の接尾辞	intrg. 疑問詞
1 一人称	intrj. 間投詞
2 二人称	Loc. 匂格
3 三人称	neg. 否定辞
Abl. 奪格	(indef.) past (不定) 過去
adv. 副詞	pl. 複数
cond. 条件法	pol. impv. 丁寧命令法
conj. pt. 接続分詞	Poss. 所有形
D. 与格	postp. 後置詞
Dir. 直格	pres. 現在
Erg. 能格	pt. 分詞
expl. 虚辞	sg. 単数
f. 女性	subj. 接続法
fut. 未来	V. 呼格

[1]

a:yas	vate:	gayas	na	vate:
yun	vath	gatshun	vath	
past 1. f. sg.	f. sg. Abl.	past 1. f. sg.	neg.	f. sg. Abl.
suman	sothi	maŋz lu:stu-m		do:h
sum	soth	lo:sun		
f. pl. D. m. sg. Abl.	postp.	past m. 3. sg. + 1. D		m. sg. Dir.
camdas	vuchu-m	ta	ha:r	na
camdi	vuchun			ate:
m. sg. D.	past m. sg. + 1. Erg.	'and'	m. sg. Dir.	ati
na:va-ta:ras	dima	k'a:h	boh.	
na:va-ta:r	d'un			
m. sg. D.	fut. 1. sg.	intrg. Dir.	sg. Dir.	adv.

[2]

a:mi	pana	sədaras	na:vi	chas	lama:n
o:m	pan	sədar	na:v	a:sun	lamun
m. sg. Abl.	m. sg. Abl.	m. sg. D.	f. sg. D.	pres. 1. f. sg.	pres. pt.
kati	bo:zi	day	m'o:n	me-ti	diyi
	bo:zun				d'un
intrg. expl.	fut. 3. sg.	m. sg. Dir.	m. sg. Dir.	sg. D.	fut. 3. sg.
a:men	ṭa:ken	po:n'	zan		shama:n
o:m	ṭo:k				shamun
m. pl. D.	m. pl. D.	m. sg. Dir.	'as, like'		pres. pt.
zuv	chu-m	brama:n	gara		gatshaha.
	a:sun	bramun			gatshun
m. sg. Dir.	pres. 3. sg. + 1. D.	pres. pt.	m. sg. Dir.		past. cond. 1. sg.

[1]

私はその道¹を来た。私はその道を行かなかった。
橋を歩いていると日が暮れていた。
ポケットの中には金が見えなかった。
私は船賃²に何を与えられよう。

¹ 物理的に肉体が歩む道も、生と死を繰り返すあるいは解脱して神と合一するというような魂の道も意味する。この詩はその二通りの読み方がある。

² ha:r は Har (ハラ、シヴァ神の名) と掛かる。船賃とは三途の河の六文銭やステュクスの一オボロスのようなもので、死後渡る河の渡しにこれを払う。シヴァ神の名、つまりシヴァ神についての知識は死後役に立つことから。

[2]

弱い糸で海に船³を引けようか。
神は私の[声を]聞き私が渡るので助ける⁴だろうか。
生の焼き物⁵に水⁶が浸み込むように、私のたましいは迷う。
私が家⁷に行けるように！

³ 自己を船に喩えるのはインドにおける伝統。

⁴ 彼女のこの切望は知識に基づくが、正しい知識だけでは解脱に足りない。

⁵ 肉体を甕に喩えるのもインドにおける伝統。

⁶ 水にまつわる比喩を二つ使いながら、そのスケールは大きく異なる。

⁷ シヴァ神。

[3]

a:yas	kami	dishi	ta	kami	vate:
yun	k'a:h	dish		k'a:h	vath
past 1. f. sg.	sg. D.	f. sg. Abl.'and'	sg. D.	f. sg. Abl.	
gatsha	kami	dishi	kava	za:na	vath
gatshun	k'a:h	dish	k'a:h	za:nun	
fut. 1. sg.	sg. Abl.	f. sg. Abl.	sg. Abl. 'how?'	fut. 1. sg.	f.sg.Dir.
anti	da:y	lagi-m-ay		tate:..	
		lagun			
adv.	m. sg. Dir.	subj. 3. sg. + 1. D. + emph.		adv.	
chə:nis	phokas		ka:mh ti no:	sath.	
chon	phokh				
m. sg. D.	m. sg. D.	'nothing at all'	m. sg. Dir.		

[4]

ləlith ləlith	vada-y	boh	va:y	
	vadun			
adv.	fut. 1. sg + 2. D.	sg. Dir.	intrj.	
tsetta:	muhuc		peyi-y	ma:y
tsetta	muh		p'on	
m. sg. V.	m. sg. Poss. f. sg. Dir.		past 3. f. sg. + 2. D.	f. sg. Dir.
roziy	no:	pata	lo:ha lamgarac	tsha:y
ro:zun			lo:h lamgar	
fut. 3. sg.	neg.	adv.	m. sg. Poss. f. sg. Dir.	f. sg. Dir.
niza-svaru:p	k'a:h	mothu-y	ha:y.	
		mashun		
m. sg. Dir.	'why?'	past 3. m. sg. + 2. D.	intrj.	

[3]

どの方向から私は来たのか。そしてどの道を。
私はどの方向を行くのか。
いかに道を知れよう。
最後に教え⁸をそこで聞ければ。空な息吹⁹に主体はない。

⁸ 自己と最高存在たる我の一致こそ、知るべき教えである。

⁹ 自己を完成させられなければ、生は空な息吹に他ならない。

[4]

優しく優しくお前の為に私は泣く。思考器官よ！
迷いの執着がお前に起った。
後には鉄の錨¹⁰の影はお前に残らない。
悲しい哉、お前は本性をなぜ忘れたのか。

¹⁰ 湖の多いカシミールでは日常的なモノである。比喩の上で錨は自己という船を世界に拘束する。

[5]

na:badi	ba:ras	atagamd	d'ol	go:-m
na:bad	ba:r			gatshun
m. sg. Abl.	m. sg. Abl.	m. sg. Dir.	m. sg. Dir.	past3.m.sg.+1. D.
diha-ka:n	hol	go:m	h'aka	k'aho:
m. sg. Dir.	m. sg. Dir.	gatshun	hekun	
		past 3. m. sg. + 1. D.	subj. 1. sg.	'how?'
gwarisund	vanun	ra:vina	t'ol	p'o:-m
gwar		ra:vun		p'on
m. sg. Poss. m. sg. Dir.	inf.	inf. Abl.	m. sg. Dir.	past3m.sg. + 1 D.
pahali	rost	kh'ol	go:m	h'aka
puhal			gatshun	k'aho:..
m. sg. Abl.	postp.	m. sg. Dir.	past 3. m. sg. + 1. D. subj. 1. sg.	'how?'

[6]

ga:tul-a:h	akh	vuchu-m	bochi	sə:t'	mara:n
m. sg. N. + indef.	'I'	vuchun			marun
		past 3. m. sg. + 1. Erg. f. sg. Abl.		postp.	pres. pt.
pan	zan	hara:n	pohani	va:va	la:h
m. pl. Dir.	'as, like'	harun	poh		va:v
		pres. pt.	m. sg. Poss. m. sg. Abl.	m. sg. Abl.	adv.
neshabod	akh	vuchu-m	va:zas	ma:ra:n	
m. sg. Dir.	'I'	vuchun	va:z	ma:run	
		past 3. m. sg. + 1. Erg.	m. sg. D.	pres. pt.	
tana	lalla boh	pra:ra:n	tshene-m	na	prah.
adv.	sg. Dir.	pra:run	tshenun		
		pres. pt.	subj. 3. sg.	neg.	f. sg. Dir.

[5]

砂糖の荷重¹¹で私の肩紐は緩まった¹²。
私の体という弓は曲がった。どうやってなそう。
師の言うことは破壊による水、ぶくれのように私に落ちた¹³。
私の群は羊飼¹⁴をなくした。どうやってなそう。

¹¹ 現世的な迷妄を背負っている。『天路歴程』に類似の比喩がある。

¹² 迷妄を背負っても苦しむばかりである。

¹³ 執着する対象を失う痛みである。

¹⁴ 心が我についての無知に迷っている。

[6]

私は一人の賢者が飢えで死ぬのを見た。
あたかも葉がパウシャ月¹⁵に軽やかな風に落ちるように。
私は一人の愚者が料理人を打つ¹⁶のを見た。
その時から私 Lalla は待っている。世界への私の愛¹⁷が切れないか。

¹⁵ 西暦で言えば冬。

¹⁶ 料理がまずいと言って殴る。

¹⁷ 存在への熱望から自由になるのを待つ。

[7]

ə:sa:	bo:l	pəðinem	sa:s-a:		
ə:s		paðun			
m. sg. Abl.	m. sg. Dir.	impv. 3. sg. + 1. D.	'1000' + indef.		
me	mani	va:s-a:	khi:d	na	heye:
	man	va:s			h'on
sg. D.	m. sg. Loc.	m. sg. Dir. + indef.	m. sg. N.	neg.	fut.3sg.
boh	yod	sahaza	shamkara	bakts	a:sa:
			shamkar	bokt	a:sun
sg. Dir. 'if'		m. sg. Abl.	m. sg. Abl.	f. sg. Dir.	subj. 1. sg.
makaris		sa:s-a:	mal	kyah	peye:.
makur					p'on
m. sg. D.	'1000' + indef.	m. sg. Dir.	'why?'	fut. 3. sg.	

[8]

shiv	va:	ki:shav	va:	jin	va:
m. sg. Dir.	'or'	m. sg. Dir.	'or'	m. sg. Dir.	'or'
kamalaza-na:th	na:m	dəri-n			yuh
		da:run			
m. sg. Dir.	m. pl. Dir.	past 3. m. pl. + 3. Dir.		m. sg. Dir.	
me	abali	kə:sita-n		bavarez	
	abal	ka:sun			
sg. Abl.	f. sg. Abl.	pol. impv. 2. sg. + 3. Dir.		f. sg. Dir.	
suh	va: suh	va: suh			
m. sg. N.	'or'				

[7]

人は口から千の非難を私に浴びせるがいい。
痛みは私の心に居場所を得ない。
もし私が本性として¹⁸シヴァ神への信愛に満ちているなら、
なぜ鏡を千の灰¹⁹が汚そう。

¹⁸ シヴァ神にかかる「真にして実なる」という形容詞との二重義か。

¹⁹ 灰は鏡を磨くのに用いられる。

[8]

シヴァ、あるいはケーシャヴァ²⁰、あるいはジナ²¹、
あるいは蓮から生まれた主²²とそれは名前を置く。
弱い私から、存在という病を取り除きたまえ。
彼、または彼、または彼、または彼であるあなたは。

²⁰ ヴィシュヌ神。

²¹ ブッダのこと。カシミールでジャイナ教は存在感を持たなかつたことだろう。

²² ブラフマー神。

[9]

lalla boh	dra:yas	kapəsi po:shici	sətsi-y
sg. Dir.	ne:run	kapəsi po:sh	sath
	past 1. f. sg.	f. sg. Abl.	f. sg. D. + emph.
kə:di	ta	du:ni	kər-n-am
ko:d		du:n	karun
m. sg. Erg.	'and'	m. sg. Erg.	past f. sg. + 3. Erg. + 1. D.
tuyi	yali	khə:ri-n-am	zə:viji
		kha:run	zə:v'ul
f. sg. Erg.	'when'	past f. sg. + 3. Erg. + 1. D.	f. pl. Dir.
bo:vari-va:na	gəya-m	ala:mzay	lath.
bo:vur-va:n	gatshun	alo:nd	
m. sg. Abl.	past 3. m. pl. + 1. D.	f. sg. Dir.	f. sg. Dir.

[10]

dob'	yali	chə:va-n-as	dob'-kani	peṭhay
dob		cha:vun		
m. sg. Erg.	'when'	past f. sg. + 3. Erg. + 1. Dir. F	. sg. D.	postp.
saz	ta	sa:ban	matshnam	yatsay
			mathun	
f. sg. Dir.	'and'	f. sg. Dir.	past f. sg. + 3. Erg. + 1. D.	adv.
sə:tsi	yali	phira-n-am	hani hani	kə:tsa-i
		phirun		
m. sg. Erg.	'when'	past f. sg. + 3. Erg. + 1. D.	adv.	f. sg. Abl.
ada	lalli me	prə:vam	param gath.	
'then'	f. sg. D.	pra:vun		
		past f. sg. + 1. Erg. f. sg. Dir.		

[9]

私 Lalla は綿花になる希望に出た。
種をとる人、綿をすぐ人がたくさん蹴った。
紡ぐ女が私のため糸車から細い糸を引き、
編み手の工房で吊られた私を彼らは蹴った。

[10]

洗濯屋が私を洗濯石に叩きつけた時、
吸水土と石鹼が私を激しく擦った。
仕立て屋が裁ちばさみで私を細切れにするとき、
私 Lalla は最高存在の道を得た²³。

²³ 階級の低いとされる人物が登場するこの二詩節の比喩が何を表すかは難解である。Grierson は衣服を作るこの作業は全てに対応するものを一つの人生で受けるのではないとする。

[11]

na:tha:	na	pa:n	na	par	zo:nu:m
na:th					za:nun
m. sg. V. neg.	m. sg. Dir.		neg.	m. sg. Dir.	past m. sg. + 1. Erg.
sada-i		bu:du-m		yiku-y	dih
		ba:dun			
adv. + emph.		past m. sg. + 1. Erg.		'1' + emph.	m. sg. Dir.
tsa		boh boh tsa	m'u:l	na	zo:nu:m
		sg. Dir.			za:nun
			m. sg. Dir.	neg.	past m. sg. + 1. Erg.
tsa		kus	boh	kosa	chu
		k'a:h		k'a:h	a:sun
sg. Dir.		m. sg. Dir.	sg. Dir.	f. sg. Dir.	3. m. sg.
					m. sg. Dir.

[12]

kyah		kara	pə:mtsan	dahdahan	ta	ka:han
		karun	pə:mts			ka:h
m. sg. Dir.		fut. 1. sg.	pl. D.	pl. D.	'and'	pl. D.
vokshun		yath	leji	kərith	yim	gay
				karun		gatshun
m. sg. Dir.		f. sg. D.	f. sg. D.	conj. pt.	m. pl. Dir.	past 3. m. pl.
səri-y			samihan	yath	razi	lamihan
sə:r			samun			lamun
m. pl. Dir. + emph.			cond. past 3. pl.	f. sg. D.	f. sg. D.	cond. past 3. pl.
ada	k'a:zi	ra:vihe:		ka:han	ga:v.	
		ra:vun				
adv.	'why?'	cond. past. 3. pl.	pl. D.	f. sg. Dir.		

[11]

神よ！ 私は自を知らず他を知らなかつた²⁴。
私はこのただ一つの体を常に苦しめた²⁵。
お前は私、私はお前だ。同一性を知らなかつた。
お前は誰か、私は誰か、ということは(今でも)疑いた²⁶。

²⁴ 自分がいて他人がいるということに捕らわれ、我と最高我との関係を知らなかつた。あるいは自分や他人に我があるのを学びはしたが経験として知ってはいなかつた。

²⁵ 苦行を積んで、苦行は無駄だと知つた。yikuy の読みは人により意見の別れるところ。

²⁶ 「我」「最高我」が何かというのは、学んだだけで経験しない状態では必ずつきまとう疑問。Grierson (1920: pp. 28-29) がこの詩節を Lal Ded が無知を詠んだものと読むのを Parimoo (1978: pp. 42-44) は他の詩節との関連を見落とした誤読とする。

[12]

私は何をしよう、五²⁷に、十²⁸に、十一に。
この鍋²⁹を空にしてこれらは行つてしまつた。
全てが集まつたなら、縄を引いたなら、
どうして十一に属する牛³⁰は失われよう。

²⁷ 地水火風空の五元素。

²⁸ 五つの感覚器官と五つの行為器官。眼耳鼻舌身と移動・操作・発話・排泄・生殖器官。十一は思考器官を加えたもの。Hoskote (2017) は十を十の氣息と読む。

²⁹ 肉体をもつ自己。鍋、次に牛と異なるスケールで喩えられる。

³⁰ 十一人の主人がバラバラの方向に牛を連れて行こうとすれば牛は裂ける。一つの方向に縄を引けば裂けない。

[13]

yima-y yih m. pl. Dir. + emph.	she sg. D. '6'	tse sg. D. m. sg. V.	tima-y tih m. pl. Dir. m. sg. Dir.	she '6' tə: this toṭun past 1. f. sg.	me sg. D. mashis. muhun past. 1. f. sg.
yuho:-y yih m. sg. Dir. + emph.	ben m. sg. Dir.	abi:d m. sg. Dir.	tse sg. D. 'and'	ta sg. D.	me sg. D.
tsa sg. Dir.	shen pl. D.	sva:mi: m. sg. Dir.	boh sg. Dir.	sheyi sg. Erg.	mashis. muḥun past. 1. f. sg.

[14]

pot zu:ni zu:n adv. f. sg. D.	vəthith vothun conj. pt.	mot m. sg. Dir.	bolano:v <u>u</u> -m bo:la:na:vun past m. sg. + 1. Erg.
dag f. sg. Dir.	lalanəva-m lalana:vun past f. sg. + 1. Erg.	dayi-simzi day m. sg. Poss. f. sg. D.	prahe: prah f. sg. D.
lalli lalli kara:n ~karun pres. pt.	la:la m. sg. Dir.	vuzano:v <u>u</u> -m vuzana:vun past. m. sg. + 1. Erg.	
mi:lith me:lun conj. pt.	tas tih m. sg. D.	man m. sg. Dir.	shro:tsyō:-m shro:tsun past 3. m. sg. + 1. D.
			dahe: dah m.sg. Abl.

[13]

お前にある六³¹、他ならぬその六³²は私にある。
喉青黒き³³シヴァ神よ！
お前と異なり私は悲惨に喘ぐ。
お前と私は同じだがその違いとは、
お前は六の主だが私は六に迷っている。

³¹ 神の全知全能を表す六つの形容。

³² 先の「六」と同じものか違うものかはわからない。違う場合人間の六罪、六の弱さ、人生の六期間などがありえる。

³³ 乳海搅拌（世界創造）神話で生じた世界を焼く毒を飲んだためシヴァ神の喉は黒い。つまり救済の象徴。

[14]

月光(さす、夜³⁴)の終わりに起き上がり、
私は狂える³⁵心を呼び出した。
神への愛の激痛を和らげた。
「私は Lalla、私は Lalla」と叫びつつ、愛しい者³⁶の目を覚まし、
かの思考器官と合一し、私の十³⁷は清まった。

³⁴ 無知という夜。月光はシヴァ神の象徴か。

³⁵ 現世的な迷妄に狂っている。

³⁶ 彼女の我。

³⁷ 先の詩節に出た十器官だが、「湖」という語ともかかるという。

[15]

lalla boh	lu:səs	tsha:m̪də:n	ta	ga:ra:n
	lo:sun	tsha:m̪dun		ga:run
sg. Dir.	past 1. f. sg.	pres. pt.	'and'	pres. pt.
hal	me	kor-m-as		rasa-nishə-tiy
		karun		
m. sg. Dir.	sg. D.	past. m. sg. + 1. Erg. + 3. D.		'even beyond the power'
vuchun	h'ot-m-as	tə:r'a	di:thi-m-as	baran
	h'on	to:r	de:shun	bar
inf.	past.m.sg.+1.Erg+3. D.	m. pl. Dir.	past. m. sg. + 1. Erg. + 3. D.	m. pl. D.
me-ti	kal	gane:yam	ta	zog-m-as
		ganun		za:gun
sg. D. + 'also'	f. sg. Dir.	indef. past 3. f. sg.	'and'	past.m.sg.+1.Erg.+3.D.
				adv.+emph.

[16]

andriy	a:yas	tsandəra-y	ga:ra:n
	yun	tsandr	ga:run
adv.	Past 1. f. sg.	m. sg. Loc. + emph.	pres. pt.
ga:ra:n	a:yas	hihen	hih
ga:run	yun	h'uuh	h'uuh
pres. pt.	past 1. f. sg.	m. pl. D.	m. pl. Dir.
tsə:-y		hai	na:ra:n tsə:y hai na:ra:n
tse			
sg. Dir. + emph.		interj.	m. sg. Dir.
tsə:y hai na:ra:n	yim	kam	vih'.
	yih	k'a:h	v'uh
	pl. Dir.	pl. Dir.	pl. Dir.

[15]

私 Lalla は探し求めるのに疲れた。

私の活力さえも越える飢えに私は苦しんだ³⁸。

私は彼の扉に門がかかる³⁹のを見出し、私にも望みが固まつた。

そしてそこで見つめていた。

³⁸ 真実を見出す前のこと。

³⁹ 人間の努力では最高我への扉を開けることができない。

[16]

探し求めて私は来た、奥底から月光の中へ。

探し求めて私は来た、似たものとして、似たものを⁴⁰。

お前だけが、おお、神⁴¹だ。お前だけが、おお、神だ。

お前だけが、おお、神だ。この遊び⁴²は何か⁴³。

⁴⁰ 我は最高我と同一であり、吸収される。

⁴¹ na:ra:n つまりナーラーヤナは通常ヴィシュヌ神の名として用いられるがここでは一般的に神を指す。

⁴² ヒンドゥー教で、神々は全ての営為を遊びとして行うが、そこには全存在がかかっている。

⁴³ カシミール・シヴァ教では世界は存在する。なぜ何もないのではなく何かがあるのか、の義。

[17]

ye:	gora:	parami:shvara:		
intrj.	m. sg. Voc.	m. sg. Voc.		
ba:vta-m	tse	chu-y	antar	vyod
ba:vun		a:sun		
pol. impv. 2. sg. + 1. D.	sg. D.	3. m. sg. + 2. D.	m. sg. Dir.	m. sg. Dir.
dvashivay	vopada:n	kanda-pura:		
'both'	vopada:n pres. pt.	m. sg. Dir.		
huh	kava	tirun	ta	ha:h
m. sg. Dir.	'why?'	m. sg. Dir.	'and'	m. sg. Dir.
			kava	tot.
			'why?'	m.sg.Dir.

[18]

na:bistha:nas	cha-y		prakrath	zalavani:
na:bistha:n	a:sun			zalavun
m. sg. D.	3. f. sg. + 2. D.		f. sg. Dir.	pres. pt. f. sg. Dir.
hidis	ta:m	yeti	pra:n	vatagot
h'ud	postp.	adv.	m. sg. Dir.	adv.
m. sg. D.				
brahma:m̥das	peṭha	sø:t	nadi	vahavani:
bahma:m̥d	postp.	postp.	f. sg. D.	vahavun
m. sg. D.				pres. pt. f. sg. D.
huh	tava	tirun	ta	ha:h
m. sg. Dir.	'then'	m. sg. Dir.	'and'	m. sg. Dir.
			tava	tot.
			'then'	m. sg. Dir.

[17]

ああ先生⁴⁴！ 最高の主よ！ 私に教えてください。
あなたは秘密を知っている。
どちらも kanda⁴⁵の街に生じて、なぜ吹く息は冷たいのか。
なぜ吐く息は熱いのか⁴⁶。

⁴⁴ 宗教的なグル。

⁴⁵ 気息の通り道。

⁴⁶ 次の詩節で答えが示される。シャクティがシヴァに教えを乞うという図と重ねられるのか。

[18]

お前の燃え盛る根本要素は下腹⁴⁷にある。
気息は道にしたがって喉まで行く。
(あるいは)頭の梵卵から流れる川と合わさる。
それゆえ吹く息⁴⁸は冷たい。それゆえ吐く息⁴⁹は熱い。

⁴⁷ ヘソの所。臍下丹田。

⁴⁸ プラーナ（ここでは下に向かう息）に対応。気息管の上には冷たい月がある。

⁴⁹ アバーナ（ここでは上に向かう息）に対応。気息管の下には熱い太陽がある。

[19]

dihaci	lari	da:ri	bar	tropari-m
dih	lor	də:r		troparun
m. sg. Poss. f. sg. D.	f. sg. D.	m. pl. Dir.	m. pl. Dir.	past m.pl.+1. Erg.
pra:na-tsu:r	roṭu-m	ta	d'ut-m-as	dam
	raṭun		d'un	
m. sg. Dir.	past m. sg. + 1. Erg.	'and'	past m. sg. + 1. Erg. + 3. D.	m. sg. Dir.
hredyici	ku:ṭhari	andar	goṇdu-m	
hred	ku:ṭhir		gandun	
f. sg. Poss. f. sg. D.	.	postp.	past m. sg. + 1. Erg.	
om̩maki	co:buka	tuli-m-as		bam.
om̩	co:bukh	tulun		
sg. Poss. m. sg. Abl.	m. sg. Abl.	past m. sg. + 1. Erg. + 3. D.	m. sg. Dir.	

[20]

oṇka:r	yeli	layi	onu-m	
		lay	anun	
m. sg. Dir.	adv.	f. sg. D.	past m. sg. + 1. Erg.	
vuhi		koru-m	panun	pa:n
		karun		
f. sg. Dir.	past m. sg. + 1. Erg.		m. sg. Dir.	m. sg. Dir.
she vot	trə:vith	ta	sath	ma:rg
'6' m. sg. Dir.	tra:vun			roṭu-m
	conj. pt.	'and'	m. sg. Dir.	ratun
			m. sg. Dir.	past m. sg. + 1. Erg.
teli	lalla boh	və:tsas	praka:shastha:n.	
		va:tun		
adv.	sg. Dir.	past 1. f. sg.	m. sg. Dir.	

[19]

肉体の家の窓と戸を私は閉めた。
玉ねぎ⁵⁰泥棒を捕まえて声を上げた⁵¹。
心の戸棚の中に彼を縛った。
聖音 Om の鞭で彼の肌を打った。

⁵⁰ 第二義“気息”。気息泥棒とは現世的な誘惑のこと。

⁵¹ 第二義“気息を制御した”。

[20]

Om の音を専心により私が[制御下に]持ってきた時、
私は自分の我⁵²を焼けた炭とした。
六の道⁵³を捨てて七番目の⁵⁴道を捉えた。
その時私 Lalla は光の地にたどり着いた。

⁵² インドにおいて伝統的な「自己において自己を」などの重複表現を踏まえたものか。cf. Bhagavadgītā 6.20 など

⁵³ 6 のチャクラのことか。またはシャクティか。

⁵⁴ 「良い」とも読める。

参考文献

翻訳

- Sir G. A. Grierson; L. D. Barnett. 1920. *Lalla Vakyani: The Wise Sayings of Lal Ded, A Mystic Poetess of Ancient Kashmir*. Vol. 27 of Asiatic Society Monographs. The Royal Asiatic Society.
- R. Hoskote. 2017. *I, Lalla The Poem of Lal Ded*. Penguin Books India.
- J. Kak. 2007. *Mystical Verses of Lalla: A Journey of Self Realization*. Motilal Banarasidas.
- J. Kaul. 1973. *Lal Ded*. Sahitya Akademi.
- N. L. Kotru. 1989. *Lal Ded: Her Life and Sayings*. Srinagar: Utpal Publications.
- P. A. Koul. 1930. "Some Addition to the Lallâ-Vâkyâni" *The Indian Antiquary*: Vol. 59: 108-130.
1931. "Lallâ-Vâkyâni" *The Indian Antiquary*: Vol. 60: 191-193.
1932. "Lallâ-Vâkyâni" *The Indian Antiquary*: Vol. 61: 13-16.
1933. "Lallâ-Vâkyâni" *The Indian Antiquary*: Vol. 62: 108-111.
- B. N. Parimoo. 1978. *The Ascent of Self, A Reinterpretation of the Mystical Poetry of Lalla-Ded*. Motilal Banarasidas.
- Sir R. C. Temple. 1924. *The Word of Lalla the Prophetess*. Cambridge University Press.

研究

- P. A. Koul. 1921. "Life Sketch of Laleshwari" *The Indian Antiquary*: Vol. 50: 309-312.
- J. K. Odin. 1999. *To the Other Shore: Lalla's Life and Poetry*. Vitasta Publications.
- Sir R. C. Temple. 1985. "Lal Ded" in K. L. Kalla., ed. *The Literary Heritage of Kashmir*. Mittal Publications.
- S. S. Toshkhani., ed. 2002. *Lal Ded: The Great Kashmiri Saint-Poetess*. APH Publishing Corporation and Kashmir Education, Culture and Science Society.

その他

- Sir G. A. Grierson. 1932. *A Dictionary of the Kashmiri language*. The Royal Asiatic Society of Bengal.
- O. N. Koul; K. Wali. 2006. *Modern Kashmiri Grammar*. Dunwoody Press.
- S. S. Toshkhani. 2013. "Avatâra Bhatta's Bânâsura Kathâ and Its Linguistic Peculiarities" *Kriti Rakshana*: Vols. 8-9: 5-10. National Mission for Manuscripts.